

中村素堂

大分前に禅海一瀾の十六則についての話を、ビクターのレコードに作っていただいた時、名古屋の学生でテレビ・ラジオを一切聴かないという人の話を冒頭に引用した記憶がある。それについて放送局の人と話をしていると、なぜテレビ・ラジオを聴かないんですかという問いがあった。それについては、ものを考えている時間がなく一方的にどんどん進行してしまうので、ただ知るばかりで何にも役に立たないから——というような返事をしていたように思う。

これは私の浅学でむやみに推察するのを惧れるけれど、今の学生や若い人が割りに本を読まない。漫画みたいな絵の多いものばかり見て、活字の少しむずかしいものは敬遠して、学校などのやむを得ないものもやつとやつとのような。これは一概に読まない学生や青年だけを責めるのも、どんなものかと思う。私はひそかにこれはテレビ・ラジオの見過ぎによる影響ではないかと思っている。

一方的に何の勞するところもなく、一応短時間に要領よくまとめ、解説したり教えてくれるんだから、一字一字活字をおうとか、時には字引を引くなどはない面倒になるのではなからうか。

知らず識らずの間に、身につけてしまつて第二の習性みたいになるのが、読書敬遠といった現象ではあるまいか。短絡的独断説かも知れないけれど。

これは、実はわが書道界にも見られる現象で、誰か有名な大家あるいは有力作家の書を見て、その書がどんなものを研究し、どんな主張をもつて書かれているか——などは一切省略し、すぐその近似または酷似のものを作る。古典の消化などの面倒な手数は略して入選、入賞と近道を選んでいく風が多いと思う。

子供でもよく見ると、ひとりひとり個性を持っている。じっくり学んだもの、みずから工夫を凝したものはみずから巧拙以外の真摯なものが匂っている。あるいはその工夫にしても、ただ奇であればよい、流行に似ていれればよい——という工夫である。この書き方は何からヒントを得たの——と訊けば何某さんの風だという返事がかえってくる。近古の傑作に学びながら、性格に合う啓示を得たものなどは、まず暁天の星よりも少ないのではなからうか。ただ珍奇であり流行であれば何なりと得意である。決してこれは学生、青年だけではない、全現代人老幼にかかわらずない現象のようである。

書がひとつの芸術のジャンルとして貴重なのは、深い研究、年期的に入った臨書の中から自分で是非こんな風に作つてみたいという基点に至つて作つたもので、たとえいま觀賞の世界で珍重されていりやうにおもしろい行草でも、今に人気が出るだろう。値が上がるだろうと書いたものではないに違いない。懷素や秋萩を臨書しているうちに、あんな風に書くのが性格にびつたりするので、おのずからああいう風に書いていたんであらう。

手に入りやすい価格で日・中・古今の名蹟体が手に入る時代だ。面倒がらずにじっくりと取り組んで榮養価の高い作品を氣長に作つて、すばらしい自己主張をしたものである。

五月末に出た拙著『書道隨攷』を買つていただいた方々からも、あの小著に関してほとんど質問を受けたことがない。買つて下さつたけれど読んで下さっていないのだと思う。これでは利益を得たのは出版した方だけで、まことに申し訳ないような氣もするのである。呵々。

（『祭墨』昭和五十一年十月）

『筆間雜記』中村素堂隨筆集（昭和六十三年刊）より転載。